

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



編輯人 須田圭二
 發行所 長野縣上田市
 印刷所 長野縣南野市
 社名 信濃毎日新聞株式會社

諏訪地方器械製絲の發達（二）

三輪 輔

我が國の器械製絲の沿革を觀るに前橋藩主松平直克公が明治三年六月木製六人繰器械製絲を創設したのが嚆矢で同所では伊太利式製絲法で繰絲鍋は半月形、抱合装置はケンネル添緒法は抛附を採つたのである。

次いで小野組によつて明治四年東京築地に六十人繰の伊太利式器械製絲工場が建てられ繰絲を開始したのである。一方上州富岡に明治五年十一月勸業寮に於て模範工場を設立し佛蘭西式製絲法を採用した。即ち繰鍋は圓形抱合装置は共添添緒法は卷附であつた。

如斯伊太利式或は佛蘭西式の器械製絲の設置せられし後幾もなく諏訪にも洋式製絲工場が建設せられたのである。前述の小野組によつて上諏訪村字深山田（現在諏訪中學校寄宿舎）に百釜（實は九十六釜）の製絲場を建設し明治五年八月二十四日から繰絲を開始したのである。これが諏訪地方に於ける器械製絲の濫觴で大いに當地方の製絲業者（勿論庶業）

に刺戟を與へ爾後器械製絲を營む者簇出するに至つたのである。同所に於ては水力を利用し水車を用ひて動力を起し繰棒を廻轉し二人に對し一人の煮繭工女を置き繰絲湯煮繭湯は銘々に爐を作り各別になし三口取ケンネルは電式で小形の眞鍮製繰鍋は半月形銅製煮繭鍋は圓形で同じく銅製のものを使用した。

今土橋年太郎氏所藏の深山田に關する記録を見るに
 明治五年六月十二日
 一、器械道具の内瀬戸物左の品注文
 伊那赤羽根村へ申遣す。
 S 數三百六十 單 左右七百二十
 ◎ 數三百六十
 註◎はフシヨキならんか當地に於ては最初履の角のフシヨキを用ひ間もなく瀬戸のフシヨキを使用す。
 六月十六日
 一、
 十仕上凡七匁五分程に引合
 一、松本銅子屋市右衛門殿注文銅鍋

圖面相渡來る廿日迄一つ差送り候
 管見本三つは直段十八懸け跡注文
 いたし候はゞ惣休十七掛け引合同
 手附金拾兩也同人に渡す云々。
 銅製繰絲鍋（平野村武居文炳氏所藏深山田鍋）
 七月二日
 水車横シンボウ出來別條なし
 七月五日
 一、ゼン前大わく假に取立心見候至極廻り方宜敷大慶存候
 七月二十日
 一、水檢し
 壹番 湖水 伊那峠春夏（註）とは藪のこと）
 七月四分 初釜に付煮方分り兼候
 貳番 愛宕水同 七月八分
 三番 湖水 同 七月八分
 四番 愛宕水同 七月九分
 五番 角間川同

七月九分
 角間川同
 七月八分
 愛宕日向水同
 七月六分
 右六筆手當キンに替りなし（註手當ニ手觸キンニ光澤ならん）
 七番 愛宕日向水同
 七月六分
 八番 右同水同斷 同
 右貳筆キン落ち
 右針に横秤共分之處不分明水之勝劣無之日向水而迄は落ちなり
 第一等 愛宕水拾五匁七分（角間

川拾五匁七分
 第二等 愛宕水日向水 拾五匁三分
 第三等 湖水 拾五匁二分
 七月二十二日
 一、春蠶蛹夏蠶蛹同檢し左の如し
 一、春蠶 四升 三拾六目 壹升
 一、付九目つゝ
 一、印證議夏蠶 四升 三拾目
 壹升七目五分つゝ
 一、高印 同斷 四升 三拾目
 壹升七目五分つゝ

山本三六郎著
 化學純絹絲の完成
 工業的完成
 ¥0.30
 伊太利製絲業
 現況の衰退原因と其
 菅原貞治著
 蠶改良
 蠶絲業法規要論
 ¥2.30
 市川上縣野長
 會究研學科絲蠶 所行發
 （振替長野6418番）

現代乾繭機界ノ王座
 大和式自動輸送乾繭機
 一九三四年代表型
 製作發賣元
 株式會社
 大和三光商會
 東京京橋區京橋三丁目二番地
 電話京橋(50)五三二〇番
 營業課目
 特許大和式自動輸送乾燥機
 特許帶川三光式乾燥裝置
 特許やまぜホイロ機
 特許大和式熱湯自動還元機
 特許水野式改良ロストル
 特許アイエム・ストーカー

川拾五匁七分
 第二等 愛宕水日向水 拾五匁三分
 第三等 湖水 拾五匁二分
 七月二十二日
 一、春蠶蛹夏蠶蛹同檢し左の如し
 一、春蠶 四升 三拾六目 壹升
 一、付九目つゝ
 一、印證議夏蠶 四升 三拾目
 壹升七目五分つゝ
 一、高印 同斷 四升 三拾目
 壹升七目五分つゝ

一、木印 同断 三升 貳拾參目
 壹升七日六分つゝ
 但四升出し登釜鼠喰廢く
 右何も下々札に記す

七月二十五日

一、器械夕ド築立大凡今日半日に而
 一ト堅相濟候云々

一、夕ド築立済に付翌後より左官方
 入之こと

七月晦日

一、製造所夕ドホシ火焚佐藏遣はず
 次に同所の建物請渡し入札の際の
 記事に左の如くあり二階建なりしを
 知ることを得

一、元稽古所七間梁に拾九間半之崩
 し家を以絲塲南側相用ひ七間梁に九
 間貳階造りに取直し繪圖面之通取建
 申度事

以上依つて瀬戸製のフシキを
 用ひ抱合装置は電式三口取（最初は
 六十釜）銘々焚なりしを想像するこ
 とが出来来る。尚ほ用水については充
 分調査して愛宕水が最も適當したと
 決定してゐる諏訪湖の水は當時から
 絲量を減じ易い水と判定した。

この他月に一回の休日があり再線
 式で煮繰分業であつたことなどが記
 事によつて知ることが出来た。

不幸にして深山田製絲所は小野組
 の没落によつて二ヶ年足らずで閉業
 の止むなきに至つた。この器械建物
 は中洲村へ持ち行き中洲社として六
 十釜で製絲を行つたが間もなく解散
 し宮川村新井へ持ち行き山本社とな
 る。

この深山田製絲に倣つて器械製絲
 の設置をなす者幾出した。就中平野
 村間下に於ける中山社は規模の大な
 るものである。

中山社は武居代次郎氏外八名相謀
 り平野村間下字中由に地を下し明治
 七年十二月工を起し翌八年四月工場
 を完成し六月下旬開業した。二口取
 再線式で運轉は水車により取釜は半
 月形陶器鍋で細い眞鍮パイプに孔を

明けたものに蒸氣を通して湯を沸か
 し蒸氣は松代六工社の簡單な蒸氣罐
 を参考として大きい鑄釜を用ひ蒸氣
 を起し細いパイプの孔から噴き出さ
 せて煮繭湯線絲湯を沸かしたのであ
 る。工場は十二間に十三間の二階建
 で十二釜づゝ八通の九十六釜であつ
 た。東京築地製絲で技術を習得した
 深山田製絲の工女數名を備ひ入れ實
 地指導の任に當らせた。

今平野村役場所藏の明治十二年横
 濱共進會出品に際し記載した製絲法
 を見るに次の様である。

器械製絲法
 運轉の方 水車内徑三丈一尺六寸
 器械所 長さ十二間横十三間
 湯の沸し方 蒸氣釜十石入
 製絲釜數 壹百
 揚返人 十二人
 口出し人 自分にて口を出す
 現業役員 教師三人検査人三人
 絲結三人
 大釜の寸 五尺六寸五分廻り
 元繭 燥殺

四百回「デニール」一號 十二デ
 ニール 二號 十一デニール
 口出帶 ミゴ等
 出品一繭元繭 二升
 繭の付數 四粒
 口立湯熱度 二百度
 線絲湯熱度 百四十度

右に依つて當時の製絲法の大様を
 知ることが出来る。

次に明治十一年以降二十ヶ年の諏
 訪郡に於ける器械釜數を示す。

年次	釜數	生産額(兩)
一一	一一二二	調査を缺く
一二	一一八七	同
一三	一九一三	同
一四	一三六九	七四〇
一五	一一九〇	七四一
一六	一三〇一	八〇八
一七	一六二八	一一三四
一八	一一四二	一九九六
一九	二五七二	二七五三
二〇	三一五九	三二七〇
二一	四二三四	四六二六
二二	五三三二	五九一七
二三	七三三〇	七七七八
二四	七四五二	八八二一
二五	八四二〇	一一四〇五
二六	一〇八八三	一一三三七
二七	一三四二六	一六〇一五
二八	一三四九〇	一七〇七三
二九	一一二二二	一四〇三七

明治十一年は諏訪郡に於ては總釜數
 二二二三釜で五〇釜以上のものは

平野村間下 中山社 一〇〇釜
 宮川村新井 山本社 一〇〇
 下諏訪町 岩波芝吉 六〇
 同 増澤市郎兵衛 六〇
 平野村今井 矢鳥社 五〇
 上諏訪町大和 柳田淡一郎五〇

等である。十釜乃至二十釜位の小規
 模のもの多く工場數百二十八であつ
 た。

工場數	49	58	7	5	5	2	2
一工場釜數	10	20	20	40	50	60	100

地方蠶業試験場長協議會

昭和九年一月十五日より十九日迄五
 日間農林省本省及蠶業試験場に於て
 地方蠶業試験場長協議會が開かれた
 其際に於ける指示事項、協議事項、
 並協議結果は次の様である。

一、指示事項

原蠶種管理に關する件
 蠶品種の改良統一を圖り且斯業の統
 制に資する爲國に於て蠶品種の改良
 育成及原原種の製造配付を行ふと共
 に原蠶種の管理を爲さむとす其要項
 次の如し。

一、原々種は國に於て製造し之を道
 府縣又は第四號の許可を受けたる
 蠶種製造者に配付すること
 二、道府縣は國の配付したる原原種
 を用ひて原種を製造し之を蠶種製
 造者に配付する事
 三、蠶種製造者は第四號の許可を受
 けたる者を除くの外道府縣の配付
 したる原種を用ふるに非ざれば普
 通蠶種の製造をなし得ざること
 四、蠶種製造者は農林大臣の許可を
 受け國より直接原原種の配付を受
 け自家用原種の製造を爲し得ること

と

五、農林大臣は蠶種製造者に對し蠶
 種製造業の統制上必要な命令を
 發し得ること
 六、蠶種の移輸入又は移輸出は農林
 大臣の許可を要すること
 七、民間の品種にして優良なるもの
 は國の品種として採用し得ること
 而して本施設費施の爲國に於ては昭
 和九年度以降四ヶ年間に蠶業試験場
 の蠶種製造配付設備を増設擴張する
 ものとす其の間は従來通り希望配付
 を行ひ其の數量は設備の擴充に伴ひ
 漸次増加し設備の完備の完成と共に
 所要額全額の製造配付を爲し得るに
 至り品種の強制的整理統一を行はむ
 とす。

又一面之に應じて道府縣の原種製
 造配付設備を擴張整備せしむる爲後
 年度に於て國庫より設備費に對し相
 當の補助金を交付し之が完成を期せ
 るとす。

二、協議事項

一、繭生産費の低下に關する件
 繭生産費の低下を圖り養蠶經營の
 安定を期すると共に蠶絲類の需要
 増進に資するは蠶絲業の現状に鑑

み極めて緊要の事項に属す仍て右の目的を達成する爲養蠶者をして實行せしむべき有効適切な方法に付協議せむとす。

二、蠶業試験場配付蠶種に関する件
蠶業試験場配付蠶種中地方の實狀に鑑み整理を要すべき品種及其の組合せに付協議せむとす。

三、試験研究の施行に関する件
蠶絲業に關する試験研究の進捗を圖り併せて効果の増進を期せむが爲地方蠶業試験場の試験研究事項中至要なる左記六項に付前年に引續き其の成績を討議し且今後の施行方針並方法に關し協議せむとす。

(一) 桑品種に關する試験
(二) 肥料に關する試験
(三) 收葉法に關する試験
(四) 蠶卵に關する試験
(五) 飼育法に關する試験
(六) 上蔭に關する試験

三、協議結果

一、繭生産費低下に關する件
蠶絲業の現狀に鑑み繭生産費の低下を圖るため養蠶業者をして實行せしむべき事項左の如し。

(一) 桑園に關する事項
(イ) 荒廢桑園の整理改植の徹底
(ロ) 優良桑品種の栽植
(ハ) 用途別桑園の設置
(ニ) 自給肥料の利用就中綠肥の増産

(ホ) 病虫害防除の徹底
(イ) 飼育に關する事項
(イ) 適良なる蠶品種の選擇飼育
(ロ) 飼育法の合理的簡易化
(ハ) 上蔭の改良特に改良装置の使用

(ニ) 蠶病特に蠶蛆の驅除豫防

(三) 經營に關する事項
(イ) 自給自足の方針に據る現金支出の節減
(ロ) 共同事業の強化
(ハ) 適當なる飼育時期及數量の決定

(ニ) 經營の改善に依る餘剩土地勞力並に副産物の利用
(四) 實行方法に關する事項
(イ) 養蠶實行組合の技術員設置

(二) 經營の改善に依る餘剩土地勞力並に副産物の利用
(四) 實行方法に關する事項
(イ) 養蠶實行組合の技術員設置

(一) 養蠶實行組合の技術員設置

成は整理のみを行ふ場合に於ても之を助成せられたること
(二) 政府は蠶絲業非常時局に鑑み原蠶種國家管理を急速に實施せられたること
二、蠶業試験場配付蠶種に関する件
蠶業試験場配付蠶種中左記の品種及組合せは整理を要すべきものと認む。
(一) 春蠶

(二) 夏秋蠶
削除すべき品種
國蠶支一〇五號
削除すべき組合せ
國蠶日一〇五號
追加すべき組合せ
國蠶日一一〇號
國蠶支一一〇號
國蠶支一〇六號
(以下次號)

(一) 政府は養蠶實行組合技術員設置に對し速に助成の途を講ぜられたること
(二) 府縣の特定指導實行組合設置に對し助成の途を講ぜられたること
(三) 政府に於ける桑園の改植整理助

附帶決議
(一) 政府は養蠶實行組合技術員設置に對し速に助成の途を講ぜられたること
(二) 府縣の特定指導實行組合設置に對し助成の途を講ぜられたること
(三) 政府に於ける桑園の改植整理助

削除すべき品種
國蠶支十三號、國蠶支十四號
國蠶支十五號、國蠶支一〇五號
國蠶支十七號
削除すべき組合せ
國蠶支十三號、國蠶支十四號
國蠶支十六號、國蠶支十七號
國蠶支一〇五號
國蠶支一〇六號
國蠶支一〇七號
國蠶支一〇八號
國蠶支一〇九號
國蠶支一一〇號
國蠶支一一一號
國蠶支一一二號
國蠶支一一三號
國蠶支一一四號
國蠶支一一五號
國蠶支一一六號
國蠶支一一七號
國蠶支一一八號
國蠶支一一九號
國蠶支一二〇號

母校講師三谷徹先生には豫て御病氣の處御養生相叶はせられず三月三日午前二時御卒去被遊候に付此段御通知申上候

追而告別式は三月六日午後一時母校講堂及午後三時市内新田、呈進寺に於て執行可被致候
香料の儀は不取敢本會として贈呈致置候條御了知相成度尙後日先生の御遺業を記念すべき計畫有之候に付豫め御合置願上候
昭和九年三月四日
附記 御遺族よりは更めて御通知無之管に付御了知相成度候
上田蠶絲専門學校千曲會
振替口座東京四三三四一番

針塚校長腕を振ふの事

猿橋生
時は甲戌睦月八日の宵の口。前橋は目貫通りなる赤城亭の一角より、和氣溢るゝばかりなる裡を、談笑爆笑頻りに湧いて、湧いて、星の凍り

付く如き寒空の下を、廣く掃いで行くのであつた。そは、針塚校長の來橋を迎へたる在橋同窓生の陸じき師弟の集ひであつた。居合せた面々は、
佐藤尚雄氏(蠶三) 吉村眞作氏(蠶四)
金兒文夫氏(蠶六) 大熊康代氏(蠶七選)
千吉良幸氏(蠶九) 宮入 保氏(蠶二十)
岡部彌平氏(蠶三) 小山清氏(蠶十一)
山田伴一氏(蠶十五) 土屋孝氏(蠶十五)

校長を回つて、和氣霽々たる談笑の裡に、盃は廻り、話は流れ、はずんで、力自慢と化した。各自盛んに熱を上げる時、文句よりも腕で来いと岡部氏自慢の右腕を扼して挑戦す。應、と土屋氏、六尺豊かの大男自稱柔道二段の猛者、覺えの右腕を引いて應ず。がつきと組合つた二つの利腕、右に左と捻り倒さんと力の限り、息をもつかせまいと烈しく攻め立てる。力戦十數合、如何なる隙を乗せられしか、土屋氏情しや遂にねぢ伏せられ恨を呑んで退く。續いて腕に覺えの二名目に物見せんと躍り出したが無慘、果なく雜倒され復讐に立合へる土屋氏再び憐れや返討となる。おのれ心憎し、いでや左腕にて相手仕らんと、山田氏左利の腕前にて勝誇れる岡部氏を破り、續く勢にて千吉良氏をも斃す。左にて破られし岡部氏、右にて挑戦し、見事左腕の仇を討ち、續いて挑みかゝる三名も、颯と拂へば水もたまらぬ腕の牙え、右に左に血煙立つて無慘な最後を遂げる。かくて戦勝者は、全勝の岡部氏、二勝の山田氏となり

いよ／＼校長との對戦となる。
血氣の山田氏、校長何程の事やあらん、たゞ一思ひと思へど、力戦十數合の後、もろくも捻伏らる。代る

それは千枚に免じて救して頂きたい。

昨年十月號の拙文「額忘れ症」にミスプリントの多いことを指摘して校正の責任に就て一理窟ねた處、十二月號の拙文にはサヌガ誤植が少かつた。併し肝腎の標題「忠言毒語」とあるべき語の字が話の字になつて居たのは聊皮肉だ。昔ギリシアの天文學者が、天の星ばかりみつめて居て、地の非戸に墜ちたと云ふ話があるが、餘り本文の校正に氣をとられ過ぎて標題の方を見落したと云ふ譯乎。東北のズー、辯氏に「君はシとヌの區別がなくていかんネ」と注意したら、「ズイ分氣をつけて居るけれど、つひヌラズ」問違へてスマイますので……と答へたとやら、斯うなると寧ろオ變觸で、腹も立たない。

二月號にYK生の「年賀の辯」が出た三年越の問題に、漸く此文を得たことを嬉しく思ふ。YK生の論旨は要するに年賀状は虚禮である、廢するに如くはない、併し全然廢止するも淋しいから時報へ公告だけして間に合せることにしよう。

と云ふのだ。立論が甚不徹底で、私には遺憾ながら首肯出来ない。併し私の所論に對し「まことに左様御尤も」と賛意を表し、「いつもながらの禮讓には最大級の讃辭を捧げて敬意を表する」とオダて、君子呼ばはりをして逆襲を豫防するの策に出たからには、流石の千枚もオトナシク引込むより外致し方あるまい。

年賀状ついでに、二月號の三木峰三氏に就つて、今年受取つた年賀状の内、同窓關係の分に就ての雜感をものしてみよう。花の便りの時節になつて年賀状の陰謀は甚氣がきかないけれど、そこがそれ漫語たるの所以なんデス。

今年「喪中に付」と云ふ挨拶が目に見えて多かつた。世間には富中喪を感懐して然うする者があるとかで、年末にラヂオで特に注意さへ放送されたが、同窓生の中にマサカ感懐するやうな者も居まいから、その原因を次のやうに分析して考へてみる。

一、去年は偶然近親の死亡者が多かつたのだらう。

二、去年特に多かつた譯ではないが「喪中に付」とすることが最近一種の流行性を帯びて來た爲だらう。

三、流行性とはひどい、非常時が産んだ國粹道徳の勃興とみるのが至當ではあるまいか。

いづれにしても、服喪中の穢れた身で他人に賀詞を述べるのは遠慮すべきことだと云ふ古來の習慣に依ることではあらうが、喪中の自分にとつてこそ「お目出度く」なれば、他人に向つて新年の挨拶を申述べることは一向に差支あるまい。

一步譲つて賀詞は遠慮するとしても、舊來の厚誼を謝し、將來の愛顧を乞ふことまで遠慮する筈はないと思ふ。一休あまの關係のない遠方の知人に對して殊更喪中を廣告する必要はなく、年内ならまだしも、正月勿々「喪中に付」ナンテ御挨拶は、屏氣分を傷けることになるから、却つて遠慮すべきではあるまいか。

私は去年の八月國元の實母を喪つたけれど、如上の理由で「喪中に付」をやらなかつた。處が私の母の死を知つてゐる竹内君(蠶)から、御服喪中の御心中を推察し、新年の御祝詞御遠慮申上候と云ふ行届いた御挨拶に接し、甚恐縮した次第である。

「喪中に付」の挨拶を受取つたので、さては八十幾つになるオ祖父さんが亡くなつたこと、早合點して、早速オ悔狀を出した處、死んだのは叔母さんであつた。親戚の死にまで「喪中に付」をやられたんでは、流行とはいへ喪中濫用の嫌ひがある。一月號の年賀廣告に、唐澤君(蠶)が、「母の喪中に付……」とやつたのは、我が意を得たものである。

流行と云へば今年の年賀状にイマ一つ目につくことは、活字に宋朝(ペン字のやうな書体)を使つたものゝ多いことだ。繪葉書の使用と、長文句を並べたてることゝは、近年だん／＼少くなつて來たが、清水君(蠶)と、奥田君(蠶)と湯川君(蠶)とは、毎年金目のかゝつた年賀状を下さる。二宮君(蠶)の銀地の葉書にも異色あり、北澤君(蠶)の朝鮮の地圖に大邸の現勢を表はしたのも思ひ付ではあるが、商店の廣告と間違へられる惧れがある。眞赤な日の丸を現して皇國の瑞祥を示すかたはら、自己の存在を相手に強く印象せしめようと試みる者も近年だん／＼多くなつて來た。

風雅の賀状は小見君(蠶)のを以て第一とする。薄クリーム地の台紙の縁を赤く塗つて、中央にアツサリ「賀年」とした。中島君(蠶)は毎年贈寫版の色刷りにして御念の入つた意匠を凝らす。早川教授は上中一年の坊チャンの刀になる「恭賀新年」の名刺。淺見君(蠶)の草色の肉で押した大眼子は悪くはないが稚氣がある。

長文句の隨一は坂田君(蠶)である。凡有るイデオロギイに非常時精算がなされつゝある今日、吾が蠶絲業も此危機に起て、宜しく總ての過去を精算し將來に活かすの途に轉向すべきである、所謂應急對策の如きは寧ろ第二次的の問題である。

（精算は精算の眼であらう）

る第二次的問題である。

○更生方案は多方向であるが其根本は蠶絲企業統制の確立に在り蠶絲業の統制は生産部門たる養蠶、蠶種、製絲の三者を打つて一丸とする組織機構に改むるに始る、而して其核心を製絲工業に置くことに依つて之が強化を期待し得らるゝ。

○産銷統制の困難が斯業の悩みであれば……

○製絲工業の二分野たるべき營業製絲と組合製絲の對立的傾向は時代の相貌であらうが……

○蠶絲非常時局の年頭に方り之が生産統制の方策として取て製絲工業中心論を高唱せんとする所以に有之候と言つたもの、堂々たる大論文であるが數十百枚の年賀状の中からこれだけヒマをかけて讀み、而もその論旨を風味しよるとするには、なか／＼骨が折れる。

○次は唐木田君(絲)の長文句「春光禮讚」としてから、楠公壁書——貧すると雖も浮雲の富を求むる勿れ窮すると雖も丈夫の志を屈する勿れ……(數行つゞく)とゴソクで列べ、非常時日本の姿を直視し乍ら社員一同不斷の努力精勵を續けて居ります何卒此上共一段の御指導と御引立を頂き度ふございます。敬白と結んでゐる。(度ふは度うと)するが正しい)

生、上下唯だ歡喜に満つ、昭和第九の元旦、四方を拜して讀みて光明日本前途を祝福し、併せて高堂の御慶幸を祈上候

とある。「非常時」の流行語を使つたものは多いが、皇太子殿下の御誕生を壽ぎ奉つた名文は猪坂君を以て第一とする。

△小生昨年五月「最新紡織原料論」又十一月「改版絹紡績」を上梓致し候御高見御垂教を得ば幸甚に存じ候として、自分一個の廣告だけでは氣がひけると見えて

△上田市外菅平のスキー場……滿洲に在る兵共を想ふにもまた恰好の場所に候間御出かけ下されたく候と付け加へた所は、なか／＼如才ない。

△土岡君(蠶)は、傘で卒業生指導者の一端として企畫中の「廣島縣立沼南實業學校同窓會備後表出荷組合」も漸く日暮がつきました。今年からは「特産備後表」の出荷に積極的に乗出す考で居りますから多少に不拘御下命を願ひます。

(指導者の者の)とあるが、自分個人のことでないから嫌味がない。中曾根君(蠶)は、小生も此の三月を以つて長き／＼學生生活、九大農藝化學科を離れる事に相成申候。余く裸一貫にて候が誠心誠意働く考に御座候間何卒御高堂様の御配慮御指導の程奉願上候と就職運動だ。セチ辛い世の中になつたものだが、この目先のきいた、機敏なヤリ口には感心した。コンナ君は世の中へ出て屹度働けるだらう。

岡部君(蠶)からは、「年頭偶成」と題して、

乾坤旋轉入新正
偏愧一年功不成

只喜驚聲依舊滑
草堂瑞氣與梅清

と自作の七言絶句を送つて来た。上毛下毛は勿論、読み方さへも丁度には分らないが、韻のふんであることだけは分る。今時の若い者——と云つても四十近くではあらうが——に漢詩の素養ある者は珍しい。私の知つて居る限りに於ては、この君と唐木田君位のものだ。和歌や俳句をものした風流人は一人も見當らない。

姓名判断の迷信から(?)勝手に名前を變へて居る者に田口君(絲一)と鈴木君(絲二)とがある。毎年の年賀状に住所を變へて居る者もあるがまさか、家賃不拂のためではあるまい。細村君(蠶一)に對して前年の自宅宛にしたが、一縣の主任技師ともあらう者が、さりとは情けない次第ではないか。

大筆君(絲三)は毎年印刷の餘白にペンで何とか書き添へてくる、それがトテモなつかしい。今年も、いつも乍ら元氣溢る、ばかりの御様子に拜察し慶賀の至り……蠶絲界もいよゝ多事多難、その御元氣で難關突破の程祈上候とあつた。母校の先生方から御挨拶頂くことは、いつも乍ら勿体ないこと、感謝して居る。

○ 今月の漫語は「年賀状批判」になつて了つた。その結果、千枚に對してはウツカリ年賀状も出せぬナンテ警戒されては困る。千枚だとしてそれ程諸君に對して批判的ではないのだが、漫語の材料として先づ第一に年賀状を組上りにのせてきたまでだ。この點(れん)も誤解なきやう望む……ナンテ辯解することは、千枚の沽券に關るからやめよう。

堤玄君の榮進を祝す

徳島 日開 猪澤

今回製絲科九回卒、堤玄君が愛媛縣農林技師に榮進なされた事を諸兄と共に心から喜ぶたいと思ふ。堤君が金澤生絲検査所から愛媛縣西條町、蒲檢定所支所へ轉任せられたのは確か去年の夏も過ぎた頃かと思ふ。その後半歳を出でずして此の吉報を得たのである。

元來どう言ふものか上田の製絲科出は地方官界に於て少しも振はず現在でも製絲出の地方農林技師は僅か數名しかないとの事だ。何處の府縣でも高置出が押へて居る有様で、昨年末の徳島縣會でも高置出のため上田出が押へられて居る事實を指摘した議員があつた程である。而も愛媛縣は高置出の盛んな所だと聞く。而も堤君は卒業後久しく民間にありて官界生活は日尙淺い。かかる不利な環境にあつて何故異數の拔擢を受けたか。

勿論農林省蠶絲局、愛媛縣、本校に於ける諸先輩並に上長官同僚官等の直接間接の並々な御努力の賜であるのは明かな事實である。一人の出世のためには幾多の人の努力が影に隠されて居ることを忘れてはならぬ。又一方同君の異數なる人格を見逃がす譯には行かない。

由來同君は九州男兒の典型とも稱すべく、熱と純情との塊とも稱すべき人である。情のためには涙もろく、人に接するや自ら肺腑を吐露し自ら難所に赴くの概あり、實に友情に厚くその温情玉の如く、私心なきこと明鏡の如きものである。又一方心氣芳ばしき梅花の如く、詩情を以て人世を觀ずといふ人である。文藝にも相當の作品を有して居られる。かかる高潔なる人格が君をして今回の榮を得せしめた最大原因だと思ふ。眞の處世術は權謀術策ではなく私心なき純情より外にはないと思ふ。茲で自分の事を言ふのは恐縮であるが私は生來自己中心

であり、自己の力によつて自己を榮く事が人生最上の道徳だと考へて居た。然るに最近重大事に直面して從來の考を修正せねばならなくなつた。即ち「自己を捨てる時に始めて眞の自己を見出し得る」ことを悟つたのであつて、私が前に自己だと思つて居たのは欺りの自己にすぎなかつたのである。眞の自己は虚榮の衣を脱ぎ捨てて最後に殘る無色透明なものの即ち私心なき純情がそれである。此の境地を既に体得して居られる堤君は羨ましい次第である。

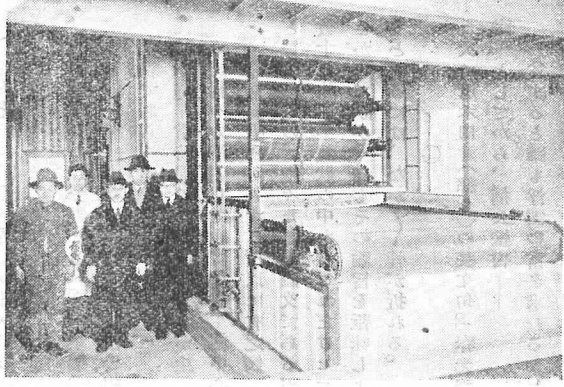
君は實に接し易い人です、試みに選つて下さい。一面識にして十年の知己となり、又幾年文通せずとも交情に何の變りもないであらう。我等の堤君といふ感が致します。何卒諸君と共に堤君の榮進を喜んで頂きたい人の榮譽を喜ぶ心こそ欺なき眞の自己の姿である。

上田蠶絲專門學校 無試験合格者

上田蠶絲專門學校に於ては二月廿四日左の如く無試験合格者を發表した。
蠶絲科 十二名 原利雄(福島縣)、星野莊次(長野縣)、佐藤雪雄(福島縣)、兒玉新一(鹿兒島縣)、宮坂義重(長野縣)、戸田一(長野縣)、中尾芳明(和歌山縣)、山田邦武(長野縣)、有間正久(福島縣)、吉江親正(長野縣)、箱山住夫(長野縣)、吉岡孝次(埼玉縣)
製絲科 五名 羽田清(福島縣)、春日章(長野縣)、横山守人(長野縣)、小口正平(長野縣)、鈴木真一(長野縣)
網絲紡績科 三名 北澤茂樹(長野縣)、瀧澤通(長野縣)、千吉良長(群馬縣)

ニユース 放送局

菅平に文理大高原生物研究所設置
○文理科大学講師としての八木博士は今度菅平に於ける高原生物研究所の設置を文理大に於て企劃提案されたが之が直ちに本年度より實施の運びとなり既に二月八日から十一日にかけて關係市、町村當局者との協議會並に實地踏査の爲八木氏は勿論、教授福井玉夫氏、助教松原益太氏、佐々木事務官、逸見會計主任、三谷營繕掛等の諸名士一行が來田され完全に協議も調査を終り歸京された。その結果長村外一市八ヶ村の共有地である菅平大



明神澤の三十町歩といふ廣大な面積をそつくり寄附して貰ふといふうまい話になつた。當時は二月の初め、雪も深いので一行は本校六川君や、久保氏の案内でスキーで出かけたが、やがて雪溶けの頃をまつて研究所の建設も着手される事であらう。

る。そして實に名案であつたのであるが然し現在の千曲會としては種々な無理が伴ふもので遂具体化しなかつた。そして文理大で此の仕事が成立つたわけである。云ひ換へれば千曲會の胎内には宿さず、文理大といふ大きな胎へ宿したといふわけである。八木氏の敏腕實に敬服に値するものがある。尙又之迄に運ぶに就ては地元側として衛生、倉澤兩氏並に養蠶部久保藤一氏等の肝入りが決して少くない事を附記する。尙母校も之に對しては可及的の後援を惜まないものである。

最後に菅平高原生物研究所研究項目の概要を記して見やう。曰く、主として亜寒帯に生育する生物全般に就きて最新の研究實體を進むるのみならず、進んで有用生物の應用的研究調査を遂げて、日本並滿洲兩國の産業開發に貢獻せんことを期し、併せて世界に類少き困難なる學術上の精究を達成せんことを本旨とす。

- 動物
 - 寒地性高地性動物の研究とその應用
 - 例、寒地棲息狐類の飼育とその毛皮向上法の研究タヌキ、シカ、カモシカの飼育とその應用
 - 越後鬼の毛色變化の研究とその大量飼育及應用
 - エゾイタチの毛色變化の研究とその應用
- 植物
 - 富士山麓産ヤマノ冬眠研究
 - 日本犬及軍用犬の耐寒性の研究
 - 傳書鳩の飼育と其の耐寒性の研究
 - 滿洲國畜産動物の飼育研究
 - 溪流動物の研究
 - 菅平動物相の研究
 - 寒地性及高地性植物の研究とその應用
 - 例、人絹川パルプ材の研究
 - 耐寒性水稻、小麦、燕麥の研究
 - 滿洲國農作物の栽培及研究
 - 滿洲國有用植物の研究
 - 藥草の栽培及其の研究
 - 牧草と研究

寒地農業の研究
高山植物園の設置
菅平植物相の研究等
といふのである。

先に文部省の高原体育研究所が建てられ更に今又同じく文部省の文理大が茲に生物研究所を設置する事により、さらに年と共に開發されて行く菅平は科學的にも愈本格的の装をもつて急テンポでシブライズされて来たわけである。やがて又避暑地として賑へられるに至るも遠い將來とは考へられない。

露絲經濟講演會 母校校友會論部では二月十七日午後一時より左記の如く露絲經濟に關する講演會を開催した。

一、變革期に於ける我邦蠶絲業とその將來
中外商業新報社 味野金平氏
二、世界經濟動向より見たる我邦蠶絲業 橫濱貿易新報社主事 森本宋氏
尙本校早川教授も同日一時間許り講演された。

長野縣スキー選手權大會 諏訪の霧ヶ峰スキー場では二月十七、十八日兩日、長野縣體育協會の主催による長野縣スキー選手權大會が開催された。母校では養蠶二年の、西澤、田近、青木、藤田の四猛者が出場、五キロの滑降レースに於て藤田四郎君は四等の榮譽を得て上田蠶草山岳部競技スキーの存在を明かにして歸つた。

蒲生教授出張 二月十八日群馬縣新町織紡工場開催に係る同工場管内養蠶指導員約一〇〇名の高等講習會に蒲生教授は講師として出張された。
又同教授は過日は逝去せられたる京都府綾部町那是製絲株式會社事務取締役片山金太郎氏の葬儀(二月二十二日)に際し校長代理として出張會葬され母校並に千曲會を代表して弔辭を呈された。

三谷徹先生御逝去遊ばさる
母校講師三谷先生には昨夏頃より病床に臥せられ後東京の病院並に東京の御實家

(令息毅氏宅)にて専ら御療養中の處養生相叶はせられず、三月三日午前二時遂に御永眠遊ばされた。御病名食道癌。四日茶毘に附せられ、御遺骨は五日上町市原匠町の御自宅に安置された。學校としての告別式は六日午後一時より母校講堂に於て、又一般葬儀は午後三時市內蓮蓮寺に於て、嚴肅に執行された。多數の名士をはじめ不取敢の通知により、京都、横濱その他遠近各地の本會員各位も多數會葬せられた。
尙香料の儀は不取敢本會として贈呈して置いたが、後日先生の御遺業を記念すべき何等かの計畫もある筈であるから豫め御諒承願ひ度い。
本記事は時報校正中に添加したものである詳細は次號に誌したい。

千曲會日誌

二月七日 西川製絲株式會社在勤の向山紀元治氏(絲二)御逝去せらるる社務執行の際に弔電を發し哀悼の意を表せり
二月十二日 母校生理學實驗室内に於て理事會開會母校創立二十五周年本會記念事業規程を審議可決せり
二月十七日 岐阜高農各務同窓會より會計規定の件照會せらるる直に回報せり
二月二十一日 横濱市の高木氏より加藤徳四郎氏(絲一)御逝去の旨電通せらるる即日弔電を發し併て高木氏へ會葬方依頼す

同日 中華民國上海陳可培氏より刊行圖書の件に關し照會せらるる直に回答せり
二月二十二日 那是製絲株式會社事務取締役片山金太郎殿御逝去の爲社務執行せらるる本會を代表して蒲生理事長會葬せり
二月二十三日 有志より送られし弔慰金第二回分故竹内清氏分金四圓故一之瀬貞嗣氏分金五圓御遺族へ贈呈せり

入會金納入者
完納者
若林 榮(蠶十九)
一金五圓也
濱村一彦(蠶十九) 山崎常雄(絲十九)

未納會費納入者
一金五圓也
水谷 郷一(絲三)
終身會費完納者
水谷 郷一(絲三)

昭和八年度通常會費納入者
(但し〇印は外に蠶絲學雜誌代入)
〇鶴田定平(蠶一〇) 河田榮一(蠶十六)
〇三瓶常四郎(蠶十六) 市村志 衛(蠶十六)
〇加藤省三(蠶十九) 若林 榮(蠶十九)
〇新井貞雄(蠶二十) 赤松與一(絲十六)
〇新尾重郎(絲十六) 〇秋山武一郎(絲十六)
藤澤喜一郎(紡十)

故竹内清氏弔慰金

金壹圓也
新樂金楠
金貳圓
齊藤菊雄 稻生得藏
貞包 新 佐藤種雄
古東幹太 井上克巳
金壹圓也
井上俊興 松村季美
井上一郎 西本朝夫
吉田榮治 小野修二
小林 勳 太田慎一郎
合計 金貳拾參圓也
遺族贈呈料 金貳拾參圓也

故一之瀬貞嗣氏弔慰金
金貳圓也
太田 元 尾崎定敬
金壹圓也
千村 敏三 藤井四郎
尾崎利雄 六川忠一郎
河合榮一 細川俊雄
山本賢市 古川正喜
永井眞吉 高瀬毅一
三瓶常四郎 市村志眞衛
中曾根靜三 宮坂 敏
笠原四郎 坂口正信
和田 敦 中澤喜雄
百瀬哲一
金五拾錢也
和田利彰 片岡清治郎
合計 金貳拾四圓也
遺族贈呈料 金貳拾四圓也

故大池彰氏弔慰金
金五拾四圓也
原田種龜 西山市三
原 清志 荻野上風
川村吉太郎 門平潤一郎
勝又藤夫 金崎眞英
柏倉豊吉 山口富五郎
竹内虎夫 中島文雄
大高雄三 安仲 勳
万石安太郎 町田壽男
後藤仙彌 小松茂久
安島義久 佐藤愛之
佐藤彰二 佐藤重太郎
岸 善亮 四方定雄

故八田直次郎氏弔慰金
金五圓也
(笠原松平 高橋誠)
小島 求 内山博雄
金貳圓也
渡部 歸 山口敏夫
金壹圓也
沼田周藏 彼末武猪
金五拾錢也
山崎修也
合計 金拾壹圓五拾錢
遺族贈呈料 金拾壹圓五拾錢

弔慰金募集廣告
本會々員
小口 一枝氏(蠶九)
向山紀元治氏(絲二)
加藤徳四郎氏(絲一)
豫而御病氣の處養生不相叶小口氏は一月十九日向山氏は二月四日加藤氏は二月十九日遂に御逝去被致候間此段本紙上を以て及御通知候也
追而有志弔慰金は小口氏及び向山氏分は三月末日迄に加藤氏の分は四月末日迄に取纏め遺族へ贈呈可致候間便宜上振替口座東京四三三四一帯へ小口氏向山氏は加藤氏弔慰金の旨御明記の上御拂込被下度候
昭和九年三月十五日
上田蠶絲專門學校
千曲會

編輯室より
「小口一枝君の靈柩を送る」と題し森千城氏から原稿を頂きましたが今月號は豫算の関係上八頁以上に頁數の増加を計る事出来ず紙面の都合上遂に掲載出来ないう事になりました。
第七回代議員會記事(三)並に昭和七年度千曲會通常會計收支決算報告は本月號に掲載致すべき筈でありましたが都合で來月號に廻しました。
三谷徹先生並に加藤徳四郎氏の御長逝に對し謹んで哀悼の意を表します。